

ASAGOING ゼミ U-18 紹介文

以下の文章は、自然栽培を大切に次々とユニークな農業を仕掛ける『ありがとんぼ農園』（和田山町）の岡村康平さんとの出会いを、インタビュアーである「私」の目を通して綴ったエッセイです。これらを読んで、続く問いに答えてください。

「とんでもないヤツがいる」とは聞いていた。だが、私は記事を書くのが仕事の「ライター」だ。職業柄、芸能人から上場企業の経営者、サラリーマン、外国人、学生、ニートやホームレスまで、これまで①のべ千人を超える人に取材してきた。自慢ではないが、ちよつとやそつとの「とんでもなさ」では驚かない。その私を感じたのだ。「この人は、本当にとんでもないな……」。

——岡村康平さん（38）は、和田山で農業を営んでいる。しかし、まずこの農業のやり方がとんでもない。「自然栽培」だ。自然栽培とは、自然の力をいかに引き出す、永続的で体系的な農業方式のこと。もう少し分かりやすくいうと、肥料や農薬を一切使わず、植物と土が本来持つ力を引き出して栽培するやり方である。自然界を教師にし、自然から学び、自然を尊びながら、自然に添って作物を栽培するのだ。

農家といえども商売だから、儲からなくては生活できない。そこで、一般的にはできるだけ効率よく、あるいは大量に生産するために、自然栽培とは真逆の、あらゆる設備や農薬を用いる。もちろん、決して②それが悪いのではない。あくまで②それが普通のことなのだ。私だつてたぶんそうする。そのほうが楽そうだし、③人間の技術進化やあらゆる発明は、いつだつて「楽をしたい」という欲望から生まれているのだから。

なのに、岡村さんはそれをやらないというではないか。自然栽培は、ある意味で人間の技術進化に逆行するかのような行為だ。さぞかし「農」に対する労力を惜しまない、生真面目な、気難しい職人のような、あるいは神のように素晴らしい人格の持ち主なのだろう。そう思つて彼に会いに行った。ところが……

「自然栽培がたいへん？逆ですよ。だつて、（種を）まけばええだけですやん。まげばできる。後は寝とけばいいんですから」などと軽口を叩くではないか。さらに「僕はね、とにかく楽をしたいんです。仕事なんて早く終わらせて、寝たり飲んだりしたいじゃないですか。いろいろ試してみたけど、それをとことん追求したら④こうなつた」と、涼しい顔で言つてのける。個人的には、自然栽培ではなく『できちゃつた農法』と呼んでいるらしい。何ともつかみどころのない、ひょうひょうとした態度。さらに、横道にそれ聞いてないことまでどんどん喋り、何の話をしてたのか分からなくなる。完全に彼のペースで話が進む。インタビュアーとしては、「何も話さない人」の次に厄介なタイプなのだが、不思議と嫌な感じはしなかった。いつしか「岡村ワールド」に引き込まれ、彼への興味がさらに大きくなつていた。⑤「この人、予想以上にとんでもな

いぞ……！」

岡村さんは、農作物やそれを育てる行為を、自然の一部と考えている。だから極力、人間の手を加えない。それは従来の農業の常識をことごとく覆す行為であり、非常識だと笑う人も多かったという。しかし、やはりこの男、とんでもない。そんな批判などこ吹く風で、次々にチャレンジを行った。キーワードは⑥「循環させる」⑦「常識を疑う・やってみる」だ。

例えば米。通常、田んぼに引く水は、水路に水門を付けてその量を調節する。水の流れを止めないと、水温が上がらずに稲が冷害に負けることがあるからだ。また、散布した除草剤がすぐに流れ出してしまうため、効果を発揮しにくい。しかしそれでも、岡村さんは水を止めない。「だって、流したり止めたり、面倒じゃないですか。源泉かけ流しですよ」と笑う。面倒って！いや、そうかもしれないけど……それでいいのかよ！何を温泉みたいなことを言っているのか、^⑦開いた口がふさがらなくなる。さらに、除草剤をまいてもどうせ流れるのだから、散布の手間が初めから省けてむしろいいとまで言う。やはり、楽をしたいからだそうだが、なんという逆転の発想、なんという猛者だろうか……

最初はこうした彼の発想を、単に天邪鬼なだけかと思ったが、次に発したひとことに彼の真意が込められていると感じた。「僕は田んぼを小川の一つとして考えてるんです」。ヒントになったのは、川に生えている葦（よし）や葦（あし）。米と同じイネ科だ。川の流れの中でも、周りに雑草が生えていても元気に育っているのを見て「これだ！」と感じたという。直観のようなもので、合理的な根拠はなかったが、わくわくしたというから実に彼らしい。

ところが、実際にやってみると、きちんと合理性があった。「かけ流し」にすることで逆に雑草が定着しにくいことが分かったのだ。かけ流しで水中の酸素が増えるため、酸素を好まない雑草が発芽しないためだ。もう一つ懸念されていた水温の低さについての問題も、暖かくなる時季に田植えを遅らすことで解消できた。しかもそのぶん収穫期も遅くなるため、忙しい収穫作業が台風の時季と重なる面倒が減り、さらに楽なことが増えた。つまり、むしろかけ流しのほうが朝来の気候・地形には合っていたのだ。

それだけではない。一つの田んぼで複数種の米を育てるという、これまた現代の常識ではあり得ないことをやっている。これも「一緒に育てたほうが楽だから」という理由だったが、実はそのほうがお互いの根がうまく絡んで支えあい、強く育った。後から調べてみると、実は縄文時代には当然のように行われていた栽培法だったことも分かった。

畑もそうだ。実際に見に行つたが、「えっ？どこに畑があるの？」というのが感想だ。一見ただけでは、草むらなのか畑なのか分からない。しかし、雑草を放置することで、それらの根が毛布代わりになり、土を温める効果があつた。

つまり、水田も畑も、常識を疑い楽であることを追い求めて自由にやっていたら、自然のあるがままに任せていたら、結果としてそれが自然の循環に従つた極めて合理的な農法でもあつたということだ。そして何より、それらの米や野菜は、他のどんな作り方をしたものより、うまいと感じた。まさに、自然に委ねて自然の力で育てる、^⑧他力本願ならぬ「田力本願」といったところか。

岡村さんはどこまでも適当……いや、自然体だと言つておこう。^⑨もともと農業を含め、そこで学べる内容にはまったく興味がなかつたが、当時交際していた女性の近くに行きたいというだけの理由で、愛媛大学の農学部に進学したというからぶつ飛んでいゝ。しかしそこで、教授と議論したり、研究室の本を読みあさったりしているうちに、次第に興味がわいたというから巡りあわせとは面白い。やがて農学という学問研究だけでは物足りなくなり、「これは！」と思つた全国の農家を訪ね歩いた。そこで出会つたのが自然栽培だつたという。

そもそも朝来に戻つて来たきつかけは、全国の農家を見て回っているとき、「朝来に自給自足の生活をしている農家がある」と聞いて訪ねてみたら、偶然にも中学の同級生の実家だつたことである。肩に炭やら鹿の角やらを抱えてのしのし山を下りてきた同級生は、たくましく生きる力に溢れて、とてもかっこよく見えた。不純な動機とはいえまがりなりにも国立大に進んで専門知識を修め、それなりに若者らしい遊びもして「イケてる」つもりだったが、人として男として「完全に負けた」と思つたそう。そして「こいつが近くにおれば、農業のこともいろいろ教えてもらえるやろ」「米と味噌と醤油さえあれば死にはしない」「農業で失敗しても、バイトすれば食べていくぐらいなんとかなる」と思つたというあたりが、やはり彼らしいが。

とはいえ、それでも最初からすべてがうまくいったわけではない。当初の10年は失敗続き。稲だと思つて植えたら、ぜんぶ稗（ひえ）だつたこともある。「それくらい最初に気づけよ！」と突っ込みたくなるところだが、そのころには私ももうずいぶん岡村ワールドに染まっていた。妙に納得してしまう。案の定「稗なら稗で、味噌にしたらええわ」と思つたというから、やはり転んでもただは起きない。実際、今では^⑩味噌だけでなく、育てた農作物を使つてどぶろくやソースなどの製造販売も手掛けている。美味しく作るコツは「頑張らないこと」だそう。苦しみながら作つても、そういう味にしか

らない。楽しみながら作るから美味しくなるという。このあたりも、すべてを自然に委ねるという思いからだろう。

農作業が一段落する冬場には、山に入る。実は農業と林業は密接につながっているからだ。朝来地域の83%は山林だが、そのほとんどは所有者が放棄した状態で、荒れ放題。適度に間伐しなければ、土砂災害のもとになる。また、シカやイノシシの生息エリアが広がり、農作物への被害をもたらす。「山」の問題を解決することは、田畑を守ることにもなるのである。

ちなみに「最近は農業より林業のほうに興味が強くて」と言うので、林業の醍醐味について聞いてみた。^①まさかとは思ったが、案の定だ。いかにして「木を楽に運ぶか」を考えることだという。

とにかく、自分が楽しいと思ったこと、興味を抱いたことにどこまでも素直な岡村さん。いま住んでいる家も自分で建てた。また、奥さんが中心となって設立した、特定の園舎を持たず、大自然の中で子どもを育てる『森のようちえん』で子どもたちを育てた。そんな彼と彼の生き方、農業の在り方に憧れて移住してくる人たちもおり、地域活性にも一役買っている格好だが、もちろん本人にその気負いはない。「好き勝手にやっていたら、知らん間に朝来のためになっただ」という感覚だそうだ。

印象的だった言葉がある。「作物は、太陽と雨、大地が育ててくれますよ」。まさに自然栽培ということだろうが、私には「自分が作っているのではない、自然が作っているのだ」という意味に思えた。ひいては、人が生きることそのものも同じかもしれない。^②生きているのではない、生かされているのだ。私の個人的な意見だが、岡村さんの生き方を見ていると、まんざら間違っていないとも思う。

自然体でいること、自然に身を委ねながら、敬い、共存していくこと。それが、岡村康平という男の生き方なのだろう。どこまでも、とんでもない男だ。

問1 「①のベ千人」の「のべ」とは、同じものが重複しても、それぞれ一つと数えて合計

することです。例文の場合、同じ人に2回取材をしてもそれは2人と数え、その合計が千人を超えるということです。それをふまえて考えてください。

(1) 1日50人の警察官が、7日にわたり捜査にあたった」と書かれていた場合、警察官はのべ何人になりますか。

(2) 「のべ350人の警察官が、7日にわたり捜査にあたった」と書かれていた場合、ある1日に捜査にあたった警察官の数は、考えられる限りで最大何人でしょうか？A～Dの中から選んでください。ただし、捜査をしなかった日（1人も参加していない日）はないものとします。

A 50人
B 235人
C 344人
D 350人

問1	
(2)	(1)
	人

問2 「それ」とは何を指しますか。

問2

問3 「③人間の技術進化」生まれている」の部分を読んで答えてください。

- (1) あなたの身の回りにもあるもので、「楽をしたい」という欲求から生まれたと思う発明品を挙げてみましょう。また、その発明品が「どんな（楽をした）(1) 欲求を満たしたか」も述べてください。
- (2) あなたが何か「楽をしたい」と思うことがあるとします。それを解決するための、発明品のアイデアを考えてみましょう。
- (3) 現代のコンピュータにおける計算システムの理論を構築した数学者のノイマン。彼は「電話帳を適当に開き、さっと眺めただけで番号の合計が言えた」という逸話が残るほど驚異的な記憶力と計算能力を持った天才です。また、非常にユーモアのある人物だったともいわれています。コンピュータが完成したとき、彼は「〇〇ができた」と言ったそうですが、はたして何と言ったのでしょうか。

問3		
(3)	(2)	(1)

問4 ④「こうなったとは、具体的にどうなったのでしょうか。文中にある言葉をふまえて答えてください。」

問4

問5 「⑤この人、予想以上にとんでもないぞ……!」とありますが、ここには主語が書かれています。⑤「この人、予想以上にとんでもないぞ……!」とありますが、ここには主語が書かれています。そう思ったのは(主語は)誰ですか。

問5

問6 ⑥「循環させる」「常識を疑う・やってみる」とありますが、これらは具体的に何を指すでしょうか。文中からそれぞれ一つずつ抜き出してください。

問6
循環させる
常識を疑う・やってみる

問7 「⑦開いた口がふさがらなくなる」は「驚き、あきれる」という意味の慣用句です。慣用句には体の一部が用いられることが多いですが、以下の意味を持つ慣用句を、ヒントとなる「体の一部」を参考に答えてください。

- (1) 意味：本心を打ち明ける 体の一部：腹
- (2) 意味：かなわない(勝てない) 体の一部：歯
- (3) 意味：優れた人にあやかる 体の一部：爪

問7
(1)
(2)
(3)

問8

「他力本願」という言葉は、よく「他人任せにする」という悪い意味で使われがちですが、本来は仏教用語で「人は自分の力で生きているのではなく、仏様のような大きな力によって生かされている」（意訳）といった、良い意味の言葉です（他力の「他」とは他人のことではなく、仏様のこと）。こうした、本来の意味とは間違っ
て覚えられている、あるいは間違っただまま定着してしまった言葉は少なくありません。次に挙げる言葉も、同じように間違っ
て使われるケースが多い言葉です。それぞれ、本来はどういう意味でしょうか？A～Cの中から選んでください。

(1) おもむろに

A いきなり

B ゆっくりと

C 忘れたころに

(2) 破天荒

A はちやめちやな

B 前代未聞

C すばらしい

(3) 姑息な

A 卑怯な

B その場しのぎの

C ずるがしこい

(4) 確信犯

A 悪いと分かっている罪を犯す人

B 真犯人

C それが正しいと信じて罪を犯す人

問8			
(4)	(3)	(2)	(1)

問9

「もともとして次第に興味がわいた」とあるように、一般的には「将来やりたい」と「をきちんと見据えて（決めて）大学に行ったほうが良いと言われますが、岡村さんのような例もあります。あなたが大学に進学するとしたら、将来に対し「決めてから進学」「進学してから決める」、どちらの道を選びたいですか？それぞれのメリット・デメリットをふまえて答えてください。

問9

問10

「^⑩味噌だけでなく、育てた農作物を使ってどぶろくやソーリスなどの製造販売も手掛けている」のように、農業や水産業を営む人が農作物や魚を生産（漁獲）して売るだけでなく、それらを利用した食品加工やその流通販売まで自ら（あるいは一つの地域で）行う経営形態を「6次産業化」といい、「地域活性化につながる」と近年注目されています。これをふまえて、以下の問いに答えてください。

(1) 農家や地域にとつて、6次産業化のメリットとは何だと思いますか。

(2) 農業や漁業だけでなく、朝来市の主要産業である林業も6次産業化は可能です。あなたなら、林業をどのようなアイデアで6次産業化しますか。

自由に考えてください。

問10

(2)	(1)

問11

「^⑪まさかとは思った」とありますが、その「まさか」とは具体的に何でしょう？」「私」はどっと思っていたのでしょうか。

問11

--

問12

「^⑫生きているのではない、生かされている」と同じ意味で、別の表現で岡村さんが言っている言葉があります。それはど「^⑬」でしょう。文中から抜き出してください。

問12

--

問13

この本文のように、筆者の感じたこと、経験したことを心に思い浮かぶままに綴った文章のことを「随筆（エッセイ）」と言います。日本には歴史上、非常に有名な随筆作品がいくつかありますが、作者名をヒントに作品名を答えてください。

- (1) 清少納言
- (2) 鴨長明
- (3) 吉田兼好

問13		
(3)	(2)	(1)
吉田兼好	鴨長明	清少納言

問14

岡村さんのように、常識にとらわれず自由に自然な生き方をしたいと思えば、何が大切だと思いますか。あなたの考えを自由に答えてください。

問14